

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第 779 号 平成 26 年 8 月 1 日

ストーカーは何を考えている（3）

NPO法人「ヒューマニティ」の理事長をされている小早川氏は、加害者の一人ひとは特有の心理を持っていて、常識では取るに足らない事にもひどくプライドが傷つくのだけれども、その異様な精神状態は本人以外には想像が出来ず、被害者は何が加害者の逆鱗に触れたのかも分からずに苦しむ事になると述べています。

ストーキングの対象は、決して元の交際相手とは限りません。

ストーキングのパターンについて小早川氏は、元交際相手か元配偶者を追い求める「破恋型」がストーカーの約8割を占めているといいます。この他、付き合いのない相手に対する「イノセント型」、著名人に自分をアピールしようとする「ファン型」、社会的地位のある人に近寄るための「エグゼクティブ型」を上げていますが、「破恋型」以外は、ストーカーの一方的な思い込みや勘違いによるもので、全くはた迷惑な話です。

「破恋型」については、一度は付き合っている実感を共有していますから、問題はもっと深刻です。

最近は、出会い系サイト等を通じて簡単に付き合いが始まり、また、別れるのも、メールで「以後、付き合わない」と通知して終わりという関係が少なくないようです。

こうした中で、突然別れを告げられた方は、「理由が知りたい」「一度ちゃんと会って謝罪して欲しい」といった思いに囚われ、それがストーカー行為へと結びついてしまうケースは少なくありません。

小早川氏によれば、こうした状況に置かれたストーカーは「相手に拒絶され、見捨てられたという被害者意識を味わい続けている」といい、その耐えがたい怒りは相手が生きていだけで屈辱であり、それは相手に究極の敗北感を与える事でしか解消されないと述べています。その行きつく先が「復讐としての殺人」というのは、空恐ろしい事です。しかも、ストーカーが相手を殺してしまうと今度は自分一人では生きられない現実と直面し自殺してしまう、と述べていますが、これでは全く救いようのない地獄です。

また、ストーカーは、警察から警告されて初めて自分がストーカーであると気付く場合が多いようです。

ストーカーの多くは、警察から警告されても心から納得している訳ではありません

んから、ストーカーの被害者は、一度ストーカーに付き纏われると、たとえ警告で収まったかに見えても、いつまたストーキングされるか不安を抱えながら生活する事になります。

非常に深刻なストーカー問題ですが、真の解決とはどのようなものなのでしょうか。

長年にわたりストーカー問題に取り組んで来た小早川氏は、「加害者が加害行為を止め、相手との問題から離れ、自らの持つ根源的な動機（孤独と弱さ）や病態（依存症）に気づき、それらから解放され、新たな方向に歩き出す事」だと述べています。

ストーカーが相手との問題から離れ、根源的に開放されるというのは非常に難しい事だとは思いますが、まずは、ストーカー自身が「自分はストーカーである」事を認識する所からスタートするしかないと思います。

ストーカーに対しては、警察は法に則り速やかに、かつ、毅然と警告を含め対処すべきで、現に、北海道の警察はストーカー問題に相当の精力を注ぎ込んでいます。ただ、今のところ、ワンストップサービスで相談が受けられる機関は警察しかないのが実情ですから、被害者がもっと相談できるチャンネルを増やす必要があると思います。

また、警察はじめ保護観察所等の関係機関は、被害者が安心して日常生活が送れるようしっかりと連携し、情報を共有しなければなりません。逗子で起こったストーカー殺人事件は、警察をはじめとする関係機関の情報が十分共有されていなかったために最悪の事態を防ぐ事が出来なかったともいわれています。

その上で、ストーカー自身がこだわり続けている自縛から解放されるよう、医療機関とも連携しながら、ストーカーに対す精神的ケアを行っていく必要があります。

小早川氏は、「相手の事ばかり考える状態は薬物やアルコールの禁断症状と同じ」と述べていますが、ならばストーカーも病気として治療する必要があります。

ストーカー行為は卑劣な犯罪であり許す事は出来ません。だからといって、ストーカーを犯罪者として取り締まるだけでは、ストーカー問題の真の解決は難しいと思われる。

ストーカー行為を完全に無くす事は、恐らく不可能だと思います。そうした中で最悪の事態を防ぐためには、自分を取り巻く人達を巻き込み、不幸にしながら、蟻地獄に落ちて行こうとするストーカーに手を差し伸べ、その地獄から救い上げるための、より実効性のある仕組み作りが必要だと強く感じています。

（塾頭：吉田 洋一）